
 巻 頭 言



N. I. H.

山 本 卓 真*

NIH という言葉を御存じだろうか？。実は筆者も比較的近年知った言葉で not invented here の略だそうである。古くからあった言葉ではなさそうだが、筆者が聞いたのはアメリカ西部のあるコンピュータ会社であって英語圏一般で広く使われているかどうかも知らないがここでは言語学的な追求は重要ではない。重要なのはそのコンピュータメカのエンジニア達が個人としても集団としても追従や模倣を極度に嫌う根性がこの一語に凝縮されていることである。少し掘り下げて観察してみると単に根性の問題だけではなく技術開発における不文律のようなものが背景にあるように感ぜられるがとにかく印象的な言葉である。日本でもあるいは一部の研究機関などで同様の傾向があるかも知れないが寡聞で未だ知らない。

NIH 根性は両刃の剣であろう。独創性を促し本質的な進歩をもたらす反面、本質的でない些細なことで独自性を打ち出そうとして手間どったりひどい時にはグループ内あるいはグループ間の協調を著しく困難にしたりする。アメリカの会社のことだからそこは有能なマネージャが登場して大抵うまく裁定を下すが若干のしこりが残ることもある。

そもそも独創を追求する精神と協調性とは根本において矛盾するものであろう。しかし日本の社会ではこの矛盾にぶつかったら協調、妥協の方を選ばないと生きて行きにくいし、アメリカではちょっと自信のある人はとび出してベンチャービジネスを興すそれに金を出すベンチャーキャピタルもある。彼我の差は研究

者・技術者の根性の差だけでなく社会構造にもある。どちらが先かという疑問は鶏と卵の議論に等しい。

さて本年5月 IBM の株主総会において日本の政府援助による超 LSI プロジェクトを引例して競争の激化傾向が指摘されたそうである。またアメリカの雑誌によれば、日本がやがて自動車やテレビのようにコンピュータで輸出攻勢をかけてくるのではないかと考えている向きがあるそうである。実感として、コンピュータインダストリの中にある私達はそれどころかおくれをとらないために無我夢中であり、仮にそうなるとしても何時のことやらと思っているのだがはたのみる目は必ずしも悲観的ではないらしい。日本の技術者達は勤勉に改良に次ぐ改良をやり製造マンは品質を保ちコストをあくまで切り下げる。つまりは例によって例の如く独創によってではなく努力によってであり、この辺が海外から警戒はされても敬意はうけられない所以であろう。無論インダストリとしてこれはむしろ正道であってこの面での敬意はうけているであろうが将来のためにどうしても IH “invented here” がほしいものである。

本学会の活動状況をもみても最も先端的で進歩的であってしかるべき研究会にも驚く程のものはなかなか出現しない。細かな所では多々あるらしいけれどスケールが小さい。学会の皆さん方にも NIH 意識の問題を適当な所で是非討論願いたいと願うと共に、近年極めて多くなった海外出張者にも彼我の差を本質的な所まで観察してほしいと願うものである。

(昭和51年5月26日)

* 本会前理事 富士通(株)常務取締役